

平成19年度第1回鎌倉市次世代育成支援対策協議会 会議概要報告書

日時：平成19年6月22日（金）

午前10時～12時

会場：市役所第3分庁舎 講堂

次 第

開会

1. あいさつ
2. 鎌倉市次世代育成支援対策協議会の委員自己紹介
3. 職員自己紹介
4. 正副委員長の選出
5. 鎌倉市次世代育成きらきらプランについて
6. 鎌倉きらきら白書について
7. 今後のスケジュール
8. その他

閉会

配布資料

事前配布資料

資料1：協議会設置要綱

資料2：協議会委員名簿

資料3：(図解)「鎌倉市次世代育成きらきらプラン」推進体制と役割

資料4：鎌倉市次世代育成きらきらプラン（新規委員のみ）

資料5：鎌倉きらきら白書

資料6：スケジュール

資料7：次世代育成支援対策推進法（新規委員のみ）

資料8：行動計画策定指針（概要）（新規委員のみ）

当日配付資料

資料5-2：主な新規事業一覧

資料5-3：放課後子どもプラン事業

資料6-2：平成19～21年度日程表

資料9：子育て支援行事「海の一日冒険遊び場」実施結果

出席者（敬称略）

- | | |
|----------|--------------------------|
| 委員：松原 康雄 | （明治学院大学 教授） |
| 中村 発雄 | （鎌倉商工会議所 青年部会長） |
| 上林 忠 | （鎌倉市社会福祉協議会 常務理事） |
| 山多 美代子 | （鎌倉保健福祉事務所 保健福祉部 保健福祉課長） |
| 尾島 珠世 | （鎌倉市民生委員児童委員協議会 主任児童委員） |
| 平野 佳世子 | （かまくら子育て支援グループ懇談会 代表） |
| 宮内 淑江 | （鎌倉市手をつなぐ育成会 会長） |
| 富田 英雄 | （鎌倉市保育会 会長） |

浅田 麻由 (鎌倉市保育園保護者連絡会 副会長)
森 研四郎 (鎌倉私立幼稚園協会 振興部長)
金子 雅子 (鎌倉私立幼稚園父母の会連合会 役員)
山本 満 (鎌倉市立小学校長会 鎌倉市立小坂小学校 校長)
田沼 由美子 (鎌倉市 P T A 連絡協議会 副会長)
小坂 泰子 (鎌倉市青少年指導員連絡協議会 副会長)
鈴木 綾子 (市民公募委員)
岡田 智佳子 (市民公募委員)

欠席: 新保 幸男 (神奈川県立保健福祉大学 教授)
兵藤 忠洋 (鎌倉青年会議所 理事)

庁内推進委員会委員.....石井こども部長、安部こどもみらい課長、梅澤安全安心推進課長、田中人権・男女共同参画課長、相川保育課長、鷲塚こども相談課長、福祉政策課長(代理 曾根課長補佐)、佐藤障害者福祉課長、松平障害者福祉課長代理、市民健康課長(代理 渡邊課長補佐)、土屋公園海浜課長、飯尾教育指導課長、糸教育センター所長、島崎生涯学習課長、小山青少年課長、石塚スポーツ課長
事務局.....こどもみらい課 奈須・山村・中村・瀧澤・安西、保育課 高井

開 会

こどもみらい課長・・・平成 19 年度第 1 回次世代育成支援対策協議会を開会する。会議は(協議会設置要項)第 6 条に基づき公開、会議概要報告書についても原則公開とする。本日の傍聴者は 1 名である。

1. あいさつ

こども部長・・・<自己紹介と挨拶>

日本全国で少子化が深刻な状況である。子どもたちが育つ、より良い環境を整備し、子育てをして良かったと思える環境づくり、社会づくりを目指すため、国で平成 15 年 7 月に次世代育成支援対策推進法が成立し、自治体、企業、国民が一体となり、次世代育成に取り組むという動きが進んでいる。法律に基づいて、全国の自治体で行動計画が策定され、次世代育成支援の取組が集中的、積極的に進められているところである。国の合計特殊出生率が 6 年ぶりに上向き、2006 年の数値が 2002 年と同じ 1.32 に回復したという報道がされている。また、子どもの数も 3 万人増えたという報道もある。

鎌倉市の状況について、合計特殊出生率は、国を大幅に下回る 1.00 あたりで推移している。ただし、児童の人口は増加傾向にある。平成 12 年と 17 年の国勢調査で比較すると、年少人口(15 歳未満)は 3.5%増加しており、全国 1804 の市のなかで第 5 位の伸び率である。第 1 位は浦安市で 8.8%の伸び率である。

(年少人口の伸びの原因は)子育て中の若い世代が移り住んできたということが考えられる。海や緑に囲まれた鎌倉の自然、歴史、文化のなかで子どもを育てたいという大きな期待を寄せて鎌倉市に来ている。

多くの期待に適う、子育てをしたいと思うまち、子育てをして良かったと思うまちの実現に全力で努めていきたい。行政だけで実現することはできないので皆様のご支援、ご協力をお願いします。委員として、現在の計画推進の検証はもとより、22年度以降の新たなプランの策定へとつなぐ大切な3年間であるので、鎌倉の次代を担う子どもたちを育てていくために、ぜひ皆様のお力添えをいただきたい。

2. 鎌倉市次世代育成支援対策協議会の委員自己紹介

～委員の自己紹介～

3. 職員の自己紹介

～庁内推進委員及び事務局職員の自己紹介～

4. 正副委員長の選出

互選により、委員長に松原委員、副委員長に新保委員を選任した。

松原委員長・・・今の子どもたちのことを考えることが、次の世代につながっていく。今、子育てをどう支援するか、子どもたちの生活をどう豊かなものにしていくかを考えながら、次世代にそのことがつながっていく。鎌倉で育った子どもたちが、また鎌倉で子育てをしてくれるとよいと考えている。

議事に移る前に、協議会運営についての留意点について事務局からお願いします。

こどもみらい課長・・・本協議会は、設置要綱に基づき運営する。第3条に基づき、委員の任期は後期のきらきらプラン策定までの平成22年3月31日までとする。

松原委員長・・・次世代育成計画は5年で見直しをすることになっている。今の計画を推進していくことも大切だが、それを踏まえて後期計画をどう立てていくのかについても、皆様の意見を反映していくことになる。

5. 鎌倉市次世代育成きらきらプランについて

事務局・・・<配布資料の確認>

<鎌倉市次世代育成きらきらプランの推進体制と役割について説明>

<鎌倉市次世代育成きらきらプランの概要について説明>

松原委員長・・・資料3を見ると、幅広の関係で、部、課が関わっているとともに、行政だけではなく地域レベルの活動も網羅されている。きらきら白書の説明で実際にどういう展開をしてきているのか報告してもらおう。プランのつくり、構成、考え方についても意見を言ってほしい。きらきらプラン策定から2年たって状況も変わってきている。新たな目で、いろいろな観点で質問、意見を言ってほしい。

富田委員・・・中座するので先に意見を言いたい。現在各地域の町内会、定年退職者が子どもの登下校時の見守りをしている。小学生も挨拶をするようになるなど、子どもたちの意識

が変化した。この会がその人々を取り込んで、またそれぞれが縦割りで仕事をするのではなく、横一線になればいい。年寄りを引き込んで一緒になにかしてほしいと思うが、きっかけがないので、この見守りの成果は大変有意義だと思っている。市内全域にその事業が広まっているが、ボランティアで高齢者も元気になった。

松原委員長・・・プランをつくるときには、子どもの安全安心の話はあまり表に出てこなかった。またそれだけでなく、地域住民の交流、子どもと接する時間が子どもの育ちにも影響している。新しい観点を付け加えてほしい。

岡田委員・・・出産する場所がないことが深刻だ。次世代育成の観点から何らかに入れてほしい。また、小学生の子どもがいるが、富田委員の話を非常に実感し、毎日見守りの方に感謝している。ただ立っているだけでなく、危ないときは注意もしてくれる。危ないと声をかけるだけでなく、地域の交番や学校に掛け合い、ガードレールを敷く手配もしてくれたと聞いている。子どもたちも非常に親近感を持ち、親や近所の人以上の思いを持っている。貴重な存在であるので、何らかのかたちで一緒に次世代育成に取り組んでほしい。

鈴木委員・・・育児をしているなかでの希望。子育て中の母親を集めて、部屋で子どもたちを遊ばせるところがあるが、子育て世代だけでなく、地域のお年寄りも一緒に話や工作をする、集まるだけではなく買い物に行くぐらいの気軽さで寄れるような場所をつくってほしい。子育て中の親は悩んでストレスも溜まっているので、わからないことが多い。年配の方や子どもを育てたことのない人の考えも聞いたら、子育ても楽しくなる。膠着したものもなくなる。どうすればそのような場所がつかれるか考えてほしい。

平野委員・・・自分の子どもが小さい頃、同様の思いをした。気軽に行ける場所がなく、サークルなどに入らなければならない。空き店舗の利用などが一番気軽なやり方だと思う。横浜の施設を見学したが、立ち上げた人々の苦労は大変なものである。行政がバックアップしてくれたらやりやすいと思う。その方たちは資金も全て自分たちでやりくりしている。逆に厚生労働省がその活動に目をつけ、つどいの広場事業に発展させたという経緯がある。子育て中の親がそこまでの苦労をすることは難しいので、ぜひ検討してもらいたい。逆にPTAの方に今の小学生の生活について聞きたい。放課後どのように過ごしているか。子どもたちはどんなニーズを持っているのか。

田沼委員・・・自分の印象だが、低学年のうちには学童に行ったり、3年生ぐらいから友達どうして遊んだり、お稽古ごとや塾に行く子が多い。子育ての外注化が進んでいる。放課後の校庭開放も行われ学校で遊べるが、もう少し地域の人が学校で子どもたちと交流できる場があるとよい。人的資源はたくさんある。

平野委員・・・子育ての外注化について気になっている。お稽古ごととはともかく、放課後の居場所づくりが今後検討されていくと思うが、母親が子どもを預け、楽をすることにつながるとよくない。子どもに何が大事なのかを親も考えて、一緒に何かをつくり上げていくということがあってもよい。プロにそのような場を完全に任せるのではなく、父兄も参加できる場であってほしい。

松原委員長・・・行政だけでなく、地域でも取り組んでいるのがこのプランの特徴である。

空き店舗の話がでたが、企業や商店の子育てに関する貢献について商工会議所の中村委員の意見は。

中村委員・・・年々子どもを見かけなくなっことを実感している。30代、20代に活力や、大人らしさ、リーダー性を感じない。社会性が足りない。教育面で土曜の休日化など、子どもに優しくなった。

尾島委員・・・空き店舗の利用について。今泉台に、ちょっと困ったときに助けてもらえる「すけっと会」というボランティアのグループがある。その会を中心に7月から町内会館近くの空き店舗を有償で借り、週1回、金曜日の午前中に「ひだまりクラブ」を始める。町内会からの援助も出る。イスとテーブル、ソファがひとつあるだけだが、誰でも立ち寄って休憩、おしゃべりができ、子どものおもちゃも置く予定である。次回には利用率等の結果についてお知らせできると思う。

森委員・・・鈴木委員の意見と同じことを幼稚園園長たちも話している。鎌倉は神社仏閣が多いが遊び場がない。広い道路は自動車も歩行者も通行量が多く子どもが遊べない。子どもやまちの人たちが集うことができ、遊べる場所は小学校や幼稚園である。園によって違うが、自由に出入りでき、園庭遊具も自己責任で自由に使ってよいという幼稚園もある。市と幼稚園が連携すれば、遊ぶ場所、自由に集うことができる場所が確保できる。自由にどうぞと開いている園に限って、その園に通っている家庭の子どもが多い。園に関係ない人は行きづらい。近所というだけで自由に行けるような場所をつくる啓発活動が大事である。

松原委員長・・・きらきらプラン策定後に、障害者に関する法律が変わり、サービスの利用方法も変わってきたので、いずれ見直しするのが課題である。宮内委員に聞くが、プラン全体の中で、今後3年で見ていかなければならないところは。

宮内委員・・・地域の協力について。大船でのんびりスペースを開設している。以前は廃園になった幼稚園の園庭を利用できたが、建て替えてスペースが狭くなったので、今は公園に子どもたちを連れて行っている。障害児ということで、うれしくて大きな声を出したり、騒ぐことがある。子どもたちより、大人の理解が得られない。また、小さい子どもなどは活発に動き、大きな声を出すのはあたり前。以前、子どもの声がマンションなどで近所の苦情となり、孤立してしまうという話を聞いた。環境が良くないと親は子育てできない。虐待などにつながる可能性もある。それを防ぐためにも、周囲の理解が一番大切である。

ファミリーサポートセンター事業について。以前は支援会員がとても少なく、依頼会員が多くてバランスが悪かった。支援会員を増やすために、自治会の回覧板を利用したら、人がたくさん集まり、自治会が協力してくれるということがわかった。地域の協力を地域力として子育てに活用していけたらいい。地域の理解も得られるようになる。

松原委員長・・・このような議論を何回か繰り返し、3年後の見直しのときに具体的なかたちとしたい。もちろん緊急な課題はすぐにとりかかるべきである。居場所づくりなどは3年も待つものではなく、すぐ考えていかなければならないものである。

実際に年間を通じての事業、活動が展開されているので、具体的に今までやってきたことや、今年度やろうとしていることについて、きらきら白書にもとづいて、事務局から報告をしてもらいたい。

6. 鎌倉きらきら白書について

事務局・・・きらきら白書は、次世代育成支援対策推進法で義務付けられている推進状況を公表するための年次報告書として作成している。鎌倉市では第2回目の発行で昨年度と同様のかたちで公表していく。

<鎌倉きらきら白書について報告>

松原委員長・・・個々の事業について自分の関心があるところで気づいた点や、新規事業、今後に向けての具体的な活動事業への意見はどうか。

浅田委員・・・安全面が気になる。鎌倉市以外で幼稚園や小学校に不審者が侵入する事件がある。鎌倉は自然が多くのおびりした土地柄で犯罪が少ないと安心しているが、いつかは起こる。小学校や幼稚園、保育園の防犯面を整備してほしい。保育園から予算が少なくて整備できないと聞いた。少子化になっていくのは世の中が危ないからという面もある。預ける場所が安心できる場であるようにしてほしい。

こどもみらい課長・・・今年度からこども安全パトロール員による巡回を始めた。現時点ではまだ白い乗用車だが、7月1日から青灯をつけたパトロールカーを市内に3台配置し、基本的に1台に二人乗車して市内の幼稚園、保育園、子どもの家を基本に一日2回立ち寄り、巡回している。安全安心推進課とも連携をとりながら、不審者がでたときの対応などを模索し、少しでも安全安心な状況がつけられるよう取り組んでいるところである。

施設的にはインターホンの整備や、さすまたの配置をしている。

中村委員・・・気になっているのは発達障害児の支援について。健常者しかないクラスで生活したまま大人になってしまうという現状があると思うが、実際にあった話で、障害のある子どもと同じ班にしたら、親から学校に苦情がきたと聞いたことがある。とりまく環境や意識の向上、親の教育を図っていかなければならないと感じている。

松原委員長・・・宮内委員が地域での問題を話していたが、同じようなことが学校でもあるのだと思う。一緒に生活をして暮らしていく共生社会という地域社会づくりが大切。

教育指導課長・・・発達障害だが、学校教育においても、障害のある子どもたちをどのように支援していくかは課題である。今年度から全国的に特別支援教育ということで、各学校において校内で子どもたちを見る校内委員会の体制づくりや、教育委員会としては、専門家である臨床心理士が各学校を巡回して子どもを見てもらい、先生たちと相談をして対応について進めていこうとしている。19年度は全国的にスタートの年であるが鎌倉市においては17年度から少しずつ進めて、障害のある子どもについての支援に取り組んでいる。教師も子どもを理解する目が求められており、研修に努めている。保護者にも理解をいただきながら、今後も一人ひとりが育っていけるよう支援していくことが必要である。

山本委員・・・小坂小学校にも「わかたけ」という障害のある子どもの学級があり、9名在籍している。わかたけの子どもと普通学級の子どもの交流について、大人だったらどのような援助をしたらいいか躊躇してしまうことがあるのに、子どもはそれがなく、大人が思う以上の力を発揮し、まわりの子どもたちがすこく成長していく。子どもが人間として心豊かになり、心が広くなるのを着任して約3か月だが感じている。21年前に校舎を立て替えたときに、わかたけ学級を校長室の隣に置いた。わかたけの子どもは宝

物だと先代の校長が言っていたが、その意味がわかりかけてきた。子どものそういった姿を見ながら親も成長していくのではないかと思う。

様々な問題を抱えた親子もいる。個人面談をしているが、子どもへの支援はもちろん、家庭も支援していかなければならないと思われてくる。学校でできる範囲は限られているが、保護者も巻き込みながら取り組んでいきたい。

松原委員長・・・古くて新しい課題である。時間がかかりながら、理解が進んでいくものである。不断の努力が必要だと思う。

岡田委員・・・19年度新規事業の放課後子どもプランに非常に関心がある。

生涯学習課長・・・稲小らんらんスクールについて紹介する。平成19年度に始まった事業で、文部科学省と県と市が3分の1ずつ事業費を出し合っている事業である。今まで教育委員会が行っていた放課後地域子ども教室推進事業と、厚生労働省の放課後児童健全育成事業が連携しあって新たに行っていく事業である。学校の余裕教室等を活用して、子どもたちと地域の方の参画、協力を得ながら勉強、スポーツ、文化活動等を行っていくものである。稲村ヶ崎小学校に通学している子どもと稲村ヶ崎小学校区の子どもの家に入所している子どもが対象。6月にスタートしたが、稲村ヶ崎小学校生徒数227人のうちの36%にあたる、延べ82人の生徒が申込みしている。また子どもの家入所34人のうちの7人が教室に申込んだ。絵本の読み聞かせなどは子どもの家に声かけして事前申込みの必要なく参加してもらう。

岡田委員・・・放課後子どもプランについて、一時期新聞等で報道されたイメージで、特に働く親の期待は高かった。子育ての外注化の問題はあるが、実際に地元で子どもが安心して行ける場所がないなかで、選択肢が増えるのは歓迎されるのではないか。今後拡大の予定は。

放課後子どもプランのもうひとつの柱である厚生労働省の学童を小学校とタイアップさせるというところで、横浜市の「はまっ子クラブ」のような放課後、学校を開放して、小学生が安心して学校内で遊べるという方向について、鎌倉市は今後どうしていくのか。国の方向性としては、学校を子どもの拠点とすると受け取っているが、関谷子どもの家が今まで学校内にあったところ、学校の外に施設を探していると聞いた。国の方向に逆行しているのではないか。そのことについて聞きたい。

生涯学習課長・・・放課後子どもプランは学校の余裕教室を使って、子どもと地域の方が一緒に活動していくのが基本である。市内の状況は、深沢小学校に余裕教室ができそうなため、20年度に実施する候補としては深沢小学校が挙げられるが、いくつか課題がある。深沢小学校は生徒数が700人くらいおり、稲村ヶ崎小学校の約3倍である。余裕教室には限りがあるので、申し込みへの対応と、安全に活動できるよう監視する職員について検討しなければならない。

こどもみらい課長・・・鎌倉市の学童保育の基本的な考え方は、学校に近接した場所で、学校からいったん出て、子どもを受けるといった方向性である。現在七里ガ浜に建設中で、完成すると全小学校区に子どもの家が設置される。ただし、第一小学校や今泉小学校のように学校から離れている箇所もある。そのような場所は放課後子どもプランとの整合をはかり、できれば学校施設、あるいは近接で設置していきたいと、教育委員会と協議を重ねている。関谷子どもの家は、耐震工事のため、約半年、外に出ることになった。

耐震工事後はもとの教室に戻るが、実施計画では、近接あるいは学校敷地内に建物を建てていくことになっている。

松原委員長・・・放課後の子どもの生活については様々な意見がある。そのまま学校にいたほうがいいという意見と、子どもの生活のリズムのなかで、近接した子どもの家に行くほうがいいという意見もある。現実的に学校の空き教室や施設の使用の問題もある。状況を見極めながらの判断になるのではないか。

田沼委員・・・第一子妊娠中に鎌倉に引っ越してきたが、その頃に比べると至れり尽くせりである。鎌倉市は子どもより高齢者に優しいまちというイメージを持っている人が多いと思うが、白書を見るとそのイメージを一新できるのではないか。

産院選びについて、どこで産んだらいいのかという情報がない。

両親教室について。親に対する思春期理解への支援事業でも、両親教室のようなものできないか。乳幼児期の父親の子育て参加は貢献大だが、子どもが思春期に入ったときに問われるのは、親として、夫婦としてのありかたである。鎌倉は出生率が全国5位の伸び率ということだが、かたや30代の離婚、晩婚化が進んでいて、パラサイトシングルが多いというのも鎌倉の土地柄かと思う。思春期における両親学級はいかがか。

学校における思春期教育について、カウンセラーを全校に配置しているとのことだが、カウンセラーがいても話をできるかはカウンセラーの人柄による。保護者向けのカウンセラーを囲む会を行っている学校は多いと思うが、生徒向けに一時間でも授業があったらと思う。

子育て体験談のような、今実際に子育てをしている人と祖父母世代の子育て体験のようなものが白書にプラスされるとよい。

松原委員長・・・鎌倉は出生率は高くないが、転入者が多い。市として転入者を受け止めて鎌倉で子育てを継続してもらうことが大切。その方たちが第二子、第三子を産むときに両親教室がすごく大切である。思春期初期から中期にかけては親もとまどう。そのときに子育ての先輩にも応援をしてもらえるとよい。そういったことは行政よりは地域ぐるみで行う活動である。

教育指導課長・・・カウンセラーについて現状を説明する。子どもの心のケア、悩みごと等について、専門職である臨床心理士、学校心理士という資格を持つ人が国の事業として県から全公立中学校9校に派遣されている。カウンセラーの活動としては、子どもたち、あるいは保護者からの悩みごとの相談、またPTA等の懇談会で要望があれば子育てや思春期に関する話をしている。また、人間関係づくりプログラムで、教員とは違った専門的な知識を持っているので、ある中学校では一学年まとめて体育館で話をしてもらったという実績もある。全ての学校で同じようにやるのは難しいが、意見をいただいて、より活用できるよう学校にも伝えていきたい。また、19年度の新規事業になるが、小学校にも子どもたちが悩みごとを相談できる人をということで、元教員や地域の方を配置する心のふれあい相談員事業を開始した。

市民健康課課長補佐・・・産科については、18年度から市内で出産できる施設が一か所になり、健康福祉部としても憂慮している。18年度末から妊婦健診のできる先生に集まってもらったり、アンケートなどの調査をして、休止している分娩室や産科ベッドを利用でき

ないかという話し合いを医師会も含めて始めた。出産病院である湘南鎌倉病院、医療施設を管轄する県を含め調整して、複数施設で出産できるようにしたい。また、助産師が助産院を開業できるが、産科医師のバックアップが必要である。膨大な費用がかかることなので、すぐできるわけではないが、ゆっくりと良い方向に進んでいる。

両親教室は、男性の参加が増え、3日間の全コースを卒業する父親も年々増えている。今後、もう少し大きな子どもの子育てについても考えていきたい。思春期講演会について、これから思春期を迎える子どもが思春期を迎えたときにコミュニケーションを取れるよう、昨年度から大学のコミュニケーションが専門の先生を呼んで、10歳くらいの子どもと親で集まる講演会を行い、1名だが父親の参加もあった。父親の育児参加について、小さい子どもだけでなく、少し大きな子どもを持つ親も参加できる講座を考えていきたい。

小坂委員・・・産院の問題について。自分の周りでも、子どもを産むことに関して悩みが出ている。他市まで行き、お産をしている状況は良くない。

小中学生を対象とした活動をしているが、中高生を対象とした、これから子どもを産んでいく人たちに対して、教育的に力を入れていかなければならない。中学校長会は（次世代育成支援対策協議会に）入っていないが、中学、高校に関してもう少し考えてほしい。

松原委員長・・・子育ては就学前から思春期まで年齢的にも幅広いものである。

田沼委員・・・保育事業について。平成18年度から認定子ども園制度がスタートした。幼稚園と保育園の違いは保護者の就労の有無によって分かれているが、多様化に伴い幼保両方の機能をあわせもつ認定子ども園が全国で35か所スタートしていると聞いた。鎌倉市としてはどうか。

こどもみらい課・・・昨年12月に神奈川県でも条例ができた。県内では現在4つの園が指定されている。鎌倉市においては、一か所から幼稚園型というスタイルで実施するというところで、秋ぐらいの認定に向けて県との申請手続きをしている最中である。

7. 今後のスケジュール

事務局・・・本日の意見やホームページでの公表による市民の意見を受けて、平成20年度の推進方針をまとめていく。出前懇談会や、各地域のサロンに出向いて白書に対する意見をもらう。委員の皆さんには出身母体で出前懇談会の設定をしてほしい。

協議会の意見、市民からの意見を8月末の庁内推進委員会に諮り、平成20年度の推進方針をまとめる。3月には第2回の協議会を開催して、推進方針を報告するとともに、国に報告するための19年度の点検評価をしてもらう。

来年度、後期プラン策定に向けたニーズ調査を行い、21年度には調査をもとに後期プランの策定をしていく。

松原委員長・・・年に2回しか集まらないが、その間に主体的に取り組めることはある。意見、提案等はその都度、市に直接行い、年度末にまた持ち寄りたい。

8. その他

事務局・・・6月9日開催の海の日冒険遊び場実施状況について。鎌倉の貴重な財産である

海を利用した子育て支援イベントとして、鎌倉漁業協同組合など多くの方の協力のもと、500名を超える子育て家庭が地びき網等を行った。当日のアンケート結果によると、概ね高い評価をもらった。子育て支援施策の認知度については、次世代のプランや白書、こどもと家庭の相談室についてあまり知られていなかった。必要な施策としては保育施設の充実が一番の要望であった。市内の親子と知り合う機会になり、また子育ての相談などもでき、良かったという意見もあった。次世代育成支援の事業としては大変有効であったと感じている。

松原委員長・・・スケジュールや冒険遊び場について、何か意見は。

宮内委員・・・団体別出前懇談会について、7月末から8月の予定となっているが、この時期は夏休みで、障害児の親は懇談会ができない。

事務局・・・スケジュール表では7月中旬からになっているが、本日以降、時間を設定してもらえればいつでも出かける。

宮内委員・・・出前懇談会のお知らせを出すすると7月の会報になってしまい、7月、8月に行うのは無理である。9月なら開催できるが、育成会として22名の学齢期の母親がいるが、出前懇談会を開催したくても、一人ひとりにはできない。

松原委員長・・・各団体の都合に合わせて具体の日程は設定できることになっている。

閉 会